

所 陵

No.15

関西大学考古学等資料室彙報

昭和62年7月31日発行



蔵骨器（新羅統一時代・8世紀）韓国慶州出土

目 次

関西大学創立100周年記念事業	
サヘート遺跡(伝祇園精舎)第一次発掘調査の概要	2
インドの煉瓦造建築	6
舎衛城の考古学的調査〔1〕	8
広東商人麥燦宇と舟山・南海普陀山	10
資料室蔵・絵馬資料について	12
昭和61年度調査報告「岐阜・愛知の遺跡」	14
新収資料・紀要目次他	16

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

サヘート遺跡(伝祇園精舎)第一次発掘調査の概要

網 干 善 教

I 調査計画

関西大学では創立100周年記念事業としてインド政府考古調査局 (Archaeological Survey of India 以下 A.S.I. と表記する) との間に協定書を取り交わし、日・印共同学術調査団 (Indo-Japanese Excavation Project, Archaeological Survey of India and Kansai University, Japan) を編成、ビハール州及びウッタル・プラデーシュ州の主要仏教遺跡の調査と、それに基づいて発掘調査遺跡の選定を行うという計画に合意した。その結果、発掘調査地をウッタル・プラデーシュ (Uttar-Pradesh) 州バハライチ (Bahraich) 地区のシュラヴァステイー (Sravasti) にあるサヘート (Saheth) 遺跡と決定した。

サヘート遺跡 (Saheth・Jetavana) はマヘート遺跡 (舎衛城跡) の南方約600mほどのところにあつて、佛典では「祇樹給孤獨園」と称し、法顕 (『高僧法顕伝』) や玄奘 (『大唐西域記』) もこの地を訪れたことが知られ、佛教史上重要な遺跡である。

19世紀中葉カニンガムによって発掘調査が行われ、その後小規模な調査が継続され、遺跡や建物跡の修復・復原も行われているが、未調査地区も多い。今回の調査はその未調査地区のなかで南地区及び西北地区で地点を選び、遺構の有無・状態及び層位的な把握を目的として発掘調査を行うことにした。

II 発掘調査の実施

現地における発掘作業は、1987年1月17日より開始、3月7日終了し、次のような作業を行った。

まず測量及び発掘作業に必要なベンチマーク (BM) を設定し、磁北による南北、東西の基準線を設定した。

従来サヘート遺跡には基準となるベンチマークがなく、今回及び今後の調査に備えて、永続性のあるベンチマークを設置することにした。但しコンターラインのポイントとなる海拔高 (標高) を求めることは不可能であつたため、任意にベンチマークを設置し、0mとした。

ベンチマークの位置は、Bodhi-Tree and Stupa と称される聖蹟のレンガ積み基壇より西南方向2.99mのところである。(以後このポイントがサヘート遺跡のベンチマークとなる)。

発掘調査は、サヘート遺跡の南地区と西北地区

の2ヶ所で実施した。

【南地区】

今回発掘した南地区はサヘート遺跡の最も高い地点の一つであり、その辺では従来一度も発掘調査が実施されていなかった。ここを第一次発掘地点としグリッドを設定、遺構の有無を確かめることにした。

グリッドは、ベンチマークより南に30m離れたXA4の地点から幅 (東西) 10m、長さ (南北) 50mを掘った。(インド考古学の発掘調査では、10mを1グリッドとし、それを4区画第I～IV象限に分割する (以下ローマ数字は象限)。周囲の畦は各50cm、両グリッドを合わせて1mをとり、内部の十字形の畦は50cm、(4区画の各々は25cm) とする方法に従った。従って実質発掘する1区画は4.25m四方の区画となる。)

このように割り付けた結果、グリッドの名称は北から順にXA04、XA05、XA06、XA07、XA08の5つのグリッドと、XA04の西側に1グリッドXB04 (このグリッドはII・III・IVを発掘した) を拡張、この地区では総面積575平方mを発掘した。発掘作業の順序としては最初発掘予定地北端のXA04からはじめ、XA05の新しい建物の輪郭を検出、ついで南端のXA08を手掛け、その間の様相を観察しながら順次XA07、XA06へと掘り進めた。

この発掘調査によってすべてのトレンチ内より構造物を検出し、平面図、断面図の作成、全体・細部写真の撮影を行った。その結果、南地区に各所にレンガ積みの構造物及び遺構が約60ヶ所に見られた。但し、これらの遺構は、各トレンチ、グリッド内において重複があり、個別の造営時期の年代を正確に把握することは困難であつた。

なお各グリッド内からはテラコッタ製の人物・動物・シール・ボールそして青銅製のコイン、石製の仏像断片などが約200点、土器類は殆どが破片であるが約10,000点ほど出土した。しかし、遺構全体が数百年にわたって増改築されており、層位的には攪乱が多く、個々の構造物の出土品からの年代判定はむづかしい。

【西北地区】

サヘート遺跡の西北部において層位を確認するためベンチマークより北へ220m、そこから西へ

160mの地点、すなわち西北地区端において10m×10mのトレンチを設定し、作業を進めたところ、クシャーナ朝（紀元1世紀頃）と推定される南北方向のレンガ積みの構造物を検出した。

そこで、その構造物の裏面を知るためその西側を発掘し、状況を確認すると共に第2次調査の手懸りを握むことにした。したがって今回の調査においてはそれ以上発掘区域を拡げないことにした。

以上の経過を経て本年度調査は3月7日終了し、埋め戻しはA.S.I.が責任をもって行うことを約束し、関西大学隊は現地を引き上げた。

III 遺構及び遺物

約50日にわたる現地作業の結果、次のようなことが判明した。（ ）内のSTR（Structure）はインド側遺構番号である。

【南地区】

南地区XA04、XA05、XA06、XA07、XA08とXB04の各グリッドは次のような結果であった。

〔XA04、XA05〕 両グリッド内で16ヶ所の遺構を検出した。まとまったものとしてはXA04からXA05に及ぶ建物（STR27）であるが、これは近世もしくは近代的な建物であるとされる。地表直下にあり、発掘調査前その一部が露出していた。その南側にあるレンガ列はこの建物のテラス端であろうという見解をもった。

次にまとまった遺構としてはXA04-IIの東壁中央から西に延び、ほぼ直角に北に折れるL字形のレンガ壁である（STR29）。またXA04-IIの東壁中央やや北寄りにみられるレンガ壁は、重層の遺構（STR, 29C, D）で、上下層に時期差がある。

〔XA06〕 XA06グリッド内には18ヶ所の遺構を検出した。特に建造物としてまとまった形状を示さず、直線上もしくはL字状及びレンガ敷床面であって、乱雑に重複したり、層位的に上下関係のあることがわかる。

〔XA07〕 建築遺構と思われるもの16ヶ所、レンガ敷床面1ヶ所、溝状遺構及び炉跡または貯蔵庫と思われるもの1ヶ所を検出した。建築遺構はやはり複雑に重複し、あるいは断片的であるが、まとまったものとしてはXA07-IIIにおける方形のレンガ壁（STR5A）及びXA07-I・II・IVにわたり重複するL字状の壁（上、STR14、下、STR, 14A）があった。

また、XA07-Iの西北端には一面レンガ敷の床面（STR 8）があったが、これに対応する壁はなかった。なおXA07-IVの中央部においてやや黄色の土質を混じえた馬蹄形の炉跡または貯蔵施設と



南地区発掘調査全景

想定される遺構を検出した。

〔XA08〕 今次調査南端のXA08では18ヶ所の建築跡と2ヶ所以上のレンガ敷の床面遺構を検出した。ここも他のグリッドと同様あるいはそれ以上に複雑な重なりがみられた。

まず、XA08の中央部にまとまった建築遺構があった（STR5）。この遺構はレンガ積みも10～17段のこし、内部にレンガ敷の床面をもち、今次調査で検出した南地区遺構のなかで最も良好なもので、一区画の部屋を確認した。一部屋の規模は外側東西3.78m、南北4.89m、内法東西2.85m、南北4.13mであった。

この建物の西壁は西南隅より継ぎ足してXA08-IVを南北に通じ、その増築部の中央より東に延びる。なおこの建物の上層には時期を異にする壁面が重なっていた（STR1）。

XA08-IIIでは床面に区画のある施設をもった遺構（STR3）とこれに伴うと思われる壁を検出した。

またXA08-IVでは少なくとも6時期（上からSTR1,5,9,8,10,11）を確認した。

〔XB04〕 南方向50mにわたり発掘したXA04からXA08の間で1ヶ所西の斜面にそって10mを拡張することを目的としてXA04に西接するXB04のII、III、IVを発掘した。ここでは11ヶ所以上の遺構と、少なくとも4ヶ所以上の床面と炉跡の

ようなものの一部を検出した。まとまった建物跡はなかったが、XB04-IIでは地表下約1.5mの間に明確に5期にわたる遺構の重複(第1層、STR39、第2層、STR40、第3層、レンガ床面、第5層、STR41)が認められた。

以上のように南地区においては現在のところ60ヶ所の建築壁遺構と少なくとも10ヶ所のレンガ床面その他の遺構を検出した。これらが増改築のため非常に複雑に入り組んでおり、そのため地層は攪乱状態となり、遺構に対応する遺物、主として土器での正確な時期的な判断はできない状態であった。また、後述するようにテラコッタ、シール、コイン、石製仏像片などが出土したが、これらも、どの遺構の時期にともなうか明確でない。

しかしながら概観するに、検出した建物の主軸方向が現在の磁北より約10度から12度迄の間で東に振れていること、出土した遺物には5世紀から7～8世紀に比定できるもの、さらに大量に出土した土器が9世紀から12世紀に比定できるものでしめられ、特に12世紀末以後のムスリム様式の土器が含まれていないことから、この一群は主として中世期に編年できるものであり、それが遺構の重複からみて継続的であることが判明した。

また、サハート遺跡全体からみれば今次調査の範囲内で考えると北側地区に対して比較的新しい時期に属する。日本でもそうであるように、およそ聖地は最初局地的に造営され、それが信仰の昂揚と共に拡張され、聖地が広範囲に及ぶようになるという経過からみれば、サハート遺跡もまた北地区から順次南地区へと拡大したと考えられる。

しかも、今次調査で明らかになったように、建物が数次にわたって増改築され、それらが中世期のものであることの確認はサハート遺跡の歴史的変遷過程の一端を知ることになる。



西北地区検出の構造物

また、遺構が一定方向で遺存していることは、今すぐその意味は分からないが何等かの理由によるものと考え、問題の提起としておく。

【西北地区】

現在サハート遺跡について知られる様相は、クシャーナ朝以後のものである。それ以前にはマウリヤ朝があり、さらに2～3百年遡って釈迦の時代がある。南地区での調査の結果でも知られるように現地表下1.7mに至っても中世期の遺構が遺存する。そのことから考えればクシャーナ・マウリヤさらに釈迦時代は立地的に現在の景観とはかなり相違していたことが予想できる。それを知るためには層位的な観察を行うことが必要で、方法としては無遺物層まで深く掘り下げなければならない。こうした目的を持って今回西北地区に1ヶ所グリッドを設置し、発掘を行うことにした。選定した位置は、ベンチマークより北へ220m、その地点から西へ160m すなわちベンチマークより西北約270mにあたる一画である。

発掘作業は、第II象限から開始した。地表下約90cmほど掘進めたところレンガの攪乱が認められ、それを精査したところレンガ積み建造物を検出、北端において東西方向にほぼ直角に延びていることが判明した。

遺構はレンガが3列床状に敷き詰められており、そこからレンガを小口積みに18段を積んでいいる。そして最上面にも3列にレンガが敷き詰められている。レンガ積みの高さは94cmで、やや傾斜を持つように積み上げられている。隅角部をみると継ぎ足しではなく交互に積み上げている。西壁下部の床状部の幅は1.24m、北壁下部の床状部の幅は1.26mであった。1枚のレンガは約35×20×5.5cmの大きさで、クシャーナ朝期の様相を示し、伴出した土器からもその築造年代はクシャーナ朝(紀元1世紀頃)のものと考えられる。

こうした遺構の検出により、レンガ積みの西側の様相を通るため第IV象限を発掘したところ、先の裏側の状況を探ることが出来ると同時にもう一つの構造物を検出した。

裏面(西面)は表面(東面)とは異なり、破碎したレンガが段状に積まれており、面は直線でないかなりの傾斜を持つ。

この構造物のほかに東西方向の別のレンガ積みを検出したが、この方はかなりレンガ積みが乱れている。そして先に検出した遺構とは連ならず別の施設であるらしい。

以上の結果、この構造物はどのようなものであるかの追求は今回の調査では行わなかった。それは、

次期調査において本格的に拡張調査をすることの方がより適切であると考えたからである。

IV 出土遺物

南地区においては多量の土器（破片を含め約10,000点）と共にテラコッタ、シール、コイン、仏像片などの出土があった。

土器は、その時代判別に若干の基準の相違があったが、大勢として9世紀から12世紀のものであり、テラコッタのなかにはそれより遡る7～8世紀、三尊磚仏の断片と思われるものは9～10世紀、シールは7～8世紀、コインと花形の文様のある特殊煉瓦（塼）はグプタ朝のようであって、年代幅はかなりある。

他方、西北地区で検出された遺構にともなうものとしては主として土器類があるが、これらはシュンガー、クシャーナ朝の様式であることの確認を得た。

出土遺物の概数は次の如くである。

石 製 品	玉	12
	球	1
	錘	1
	装飾品	1
	小型ストゥーパ	1
	小型仏像	2
	杵	10
	不明	2
	小計	30
土 製 品	玉	38
	球	15
	ホップ・スコッチ	12
	円盤	1
	有孔円盤	2
	錘	3
	円錐体	3
	動物	26
	人物	2
	鳥	1
	ストゥーパ	1
	小型土器	2
	特殊煉瓦	4
	チェスの駒(?)	10
	ランプ	2
	パイプ	1
	ペンダント	1
	スタンプ	1
	スプーン	1
	土器の注口	1
	リング(?)	1
	土製品型	1
	シール	1
	不明	15
	小計	145
ガラス製品	指輪	1
	腕輪	8
	垂飾	1
	玉	4
	小計	14
鉄 製 品	釘	9
	ドアー・リング	1
	鎌	1
	棒	1
	塊	2

銅 製 品	スラッグ	3
	不明	3
	小計	20
骨 牙 製 品	腕輪	3
	コイン	2
	指輪	1
	小計	6
	装飾円盤	1
	猪牙	1
	骨片	2
	小計	4
	合計	219
土 器		約10,000

V まとめ

今次調査は、入国査証、輸入・免税許可証などの手続きのため、調査の開始が大幅に遅延した。実際に着手したのは1月17日からであったが、その後の作業は順調であった。

発掘面積は、南地区において6グリッドのうち23象限、西北地区においては1グリッドのうち2象限、合計625平方mに及んだ。この発掘によって南地区は主として多数の中世遺構を検出し、伝祇園精舎の変遷の一時期を知ることが出来た。

また、西北地区においては紀元1世紀頃のクシャーナ朝期の非常に良好な構造物の一部を検出し、第2次調査への重要な手懸りを掴むことが出来た。

さらに気球を使用しての空中撮影、関連調査としてマヘート遺跡（舎衛城跡）に関する資料収集なども行った。

第2次調査は、西北地区の遺構の拡張調査と層位的調査のために数ヶ所の地点を選んで発掘調査をすすめたい計画を持っている。そして、次期調査はA.S.I.との協議により関西大学隊は10月初旬現地に赴き、第1次調査によって出土した遺物等の実測図の作成や写真撮影を行い、11月20日頃より、発掘調査を開始する予定である。関西大学隊は1988年3月をもって調査を終了したいが、西北地区の遺構が予想より大規模なものである場合は第3次調査の実施を考慮しなければならない。

最後に関西大学当局をはじめ関西大学関係機関、特に教育後援会、駐ニューデリー日本大使館、インド政府とりわけA.S.I.をはじめ大蔵省、外務省、内務省、駐日インド大使館、駐神戸インド総領事館、壺阪寺関係者、日本航空及びニューデリー及び発掘調査現地でご協力を得た諸氏に感謝の意を表すものである。

〔追記〕本概要は第1次発掘調査時の所見であって、今後の調査の進捗、あるいはインド側との意見交換により、若干変更することもあり得ることを付記しておく。

（関西大学日・印共同学術調査団派遣調査隊長）

インドの煉瓦造建築

山 田 幸 一

1. インド建築の性格

インドは和辻哲郎『風土』にしたがえば日本列島と同じモンスーン地帯に分類され、ここでは確かに米を生産するし竹も成育する。しかしもう一步立ち入って考えると、両者の自然条件は相当異なっているように思われる。例えばインドでは地震はめったに起こらず、また亜大陸の名のあるとおり内陸部では季節によっては大陸性気候となり、列島の海洋性気候とは幾分とも様相を異にしている。さらに植生についていえば、白檀・黒檀等の工芸品材料ないし銘木として見るべきものは多くても、わが国の杉・檜のような建築用材に適した樹木は少ない。当然、建築の形態もまた日本とは異なったものとならざるを得ない。

いま関西大学創立百周年記念行事の一つとして進められている伝祇園精舎跡（サヘート遺跡）の日印共同学術調査で発掘されている建築遺構は、年代の古いものから新しいものまで全て煉瓦積みで、かつてイギリス学者等の行った調査でもこのことは同じである。また初転法輪の聖地サルナート、仏教学府の中心であったナーランダ、その何れの遺跡でも出てくる遺構は全て煉瓦造または石造で、ムスリムの時代に入って建設された壮麗な廟や城郭もまたその例に漏れず、このような遺構では木材は造作または補助的部材として用いられているに過ぎない。逆にわが国のような木造建築の遺構ないしその痕跡は絶えて見当たらない。もっとも現在でも主要街道の要所要所にはわが国の宿場を思わせるような休憩施設があり、そこには江戸期の学者の想像した建築の原始型・天地根元宮造を連想させる小屋が並んでいる。処は変わっても人間の発想は似ているという感慨に耽るとしても、しかしここで使用されている材料は細い竹か曲がりくねった木ばかりで、「宮造」着想の源となったわが出雲大社や伊勢神宮社殿の宏壮とは固より比すべくもない。結局、インドでは木造が仮に存在しても極めて小規模または粗末な建築に適用されただけで、一般の住宅も含め構造の主流は煉瓦造または石造、特に前者であったといっ

ていられたようである。このことは現在でも街道沿いにしばしば煉瓦を焼成する工場の見受けられることから推測されるし、一方、現在修理工事が進行中のサルナートのスツーパーは内部が粗石積み、外装を化粧石積みにしており、またタージマハールを始めとする回教建築の多くは外装を華麗な大理石で覆っているところを知るべきである。

煉瓦造・石造は構造的には組積式に分類される。この方式は塊（ブロック）状の材料を積み上げて壁体を構成する。この場合、壁厚は大きければ大きいほど、また開口（窓や出入り口）は小さければ小さいほど、安全な建物の出来ることはいうまでもない。このことは同時に壁体の断熱効果を向上させることにも相通じ、酷暑・酷暑等、気象条件の厳しいところでは快適な屋内気候を保つうえにも都合がよい。一方、普通の木造は架構式構造と呼ばれるが、これは柱・梁等の軸状の部材で躯体を構成するもので、この場合、その躯体さえ頑丈に組み立てておけば、壁は構造上はあってもなくてもよい存在で、したがってこれを必ずしも厚く作る必要はなく、また開口も充分広くとることが出来、極端に言えば壁の全くない建物を造ることすら可能である。インド内陸部では、建築に適した木材の得難いこととも相待って、煉瓦造等が主流になったのも理の当然である。逆に日本のように気温はそれほど苛酷でなくても、湿度が高く通風を必要とするところでは、木材資源にも恵まれていることから、ここで木造が重用されてきたのもまた当然であろう。なお日本でも古代以来、煉瓦（磚という名で呼ばれる）や石の利用法を知らなかったわけではないが、組積式では開口を大

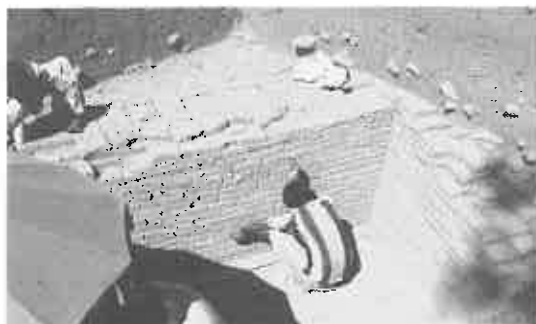


写真1 サヘート遺跡の煉瓦造積遺構

きくことは、即、構造の弱体化に繋がるから、わが国のように通風を必須とし、かつ地震の多発するところでは適当とはいえない。則ち煉瓦造等が明治以降関東大震災までの一時的流行にとどまり、建築の主流とはなり得なかった所以である。

2. インドの煉瓦造遺構

紀元前二千年を挟む前後約千年の間栄えたといわれるインダス文明の諸都市では既に規格化された窯焼煉瓦を大量に使用していた。今その代表的遺跡であるモヘンジョダロやハラッパを訪れる人は家屋は勿論、道路舗装から下水道にまでそのような煉瓦を用いて壮大な都市を築いていたことに驚かされるであろう。メソポタミアにおいても煉瓦は古くから使用されているが、ここでのそれが日乾煉瓦から窯焼煉瓦に全面的に移行するのは紀元前六世紀、ネブカドネザルがバビロンの城壁を築き直した頃からとされている。一方、黄河文明で窯焼煉瓦（小磚）の出現するのはどう遡っても紀元前後、前漢の末期からで、しかも当初は地下墳墓の構築に使用されたに過ぎない。このように考えればインド亜大陸における本格的な煉瓦使用の始期が如何に早かったかを理解出来るであろう。

既にインダス文明において以上の状況であれば、インド亜大陸の仏教遺跡が組積式構造に採っていたのは何の不思議でもなく、寧ろその風土から推して自然のことといえよう。前述のサルナート・ナーランダでも見渡す限りの煉瓦造復元遺構で埋め尽くされているのが現状である。サハート遺跡についていえば、過去の調査で知られている最古の遺構はシュンガないしクシャーナ期（BC 1世紀以降AD 2世紀頃まで）のものであるが、今回の共同学術調査でもほぼ同年代まで遡るのではないと思われる煉瓦積遺構の一部が検出された。その全貌は固より次期以降の調査に待たなければならないが、全て寸法の揃った窯焼煉瓦を用い、目地の通りもよく整然と積み上げられている。しかもこの遺構では、現在見る限り転用材は認められず、また破壊の跡もない。したがって全貌解明の暁にはその時代の技法を完全に復元し得るのではないかと期待される。

しかし煉瓦造に関し残された問題も少なくない。その最大のものの一つはアーチの起源とその



写真2 サルナート遺跡の煉瓦造遺構

伝播の経路についてである。現在までのところ、真のアーチ（true arch）は古くメソポタミアに起源を持ち同地域に継承されたほか、後にローマの勢力拡大とともに少なくとも西方諸国に伝播していったと信じられている。ところが煉瓦造に関し先進地であった筈のインダス諸都市では擬似アーチ（corbeled arch）の段階に甘んじ、遂に真のアーチを用いないままその文明は消滅した。いまインドにおいて真のアーチを自由に駆使しているのはムスリム進出以降の建築でサハートを含め古代仏教遺跡でも、復元に見る限り、その使用法は未だ知らず擬似アーチに留まっている。そして同系統文化の伝播した東南端、ジャワ島・ボロブドゥール遺跡（石積み、八世紀後半ないし九世紀前半）もまた、その規模の壮さに似ず完成した真のアーチは用いていない。この点、中国では小磚使用の始期からそれほど間もない後漢の中期までに真のアーチを全土に普及させたのと対照的である。同じく煉瓦造文化を栄えさせながら、地域毎のこのような発展段階の差は、そのまま古代文化圏間の交流状況を探る一つのよすがとなるのではなかろうか。アーチだけを採り上げてもこれだけの問題が含まれている。

いまインド亜大陸に絞って考えると、インダス遺跡と現在知られている仏教遺跡の間には年代的に相当の隔りがある。そこで以上のような疑問点を解決するためには、当然その空白が埋められなければならない。今回の調査でその全てを望むことは時間的にも無理であるが、しかしいま出土しかかっている一部遺構だけでも完全に検出されれば、その空白を少しでも埋めることが出来るのではなかろうか。その意味でも第2次調査以降の成果が期待される。

舍衛城の考古学的調査〔1〕

米田文孝

(1)

1986年11月、関西大学は創立100周年を迎えたが、この記念事業の一環として、国際文化学術交流を目的とした関西大学日・印共同学術調査団が編成され、ウッタール・プラデーシュ (Uttar Pradesh) 州に所在するシュラーヴァステイー (Śrāvastī; *Pālī Savatthī*) 遺跡の発掘調査を中心とした、総合学術調査を3年計画で実施することになった。

U. P 州は東流するガンジス河およびその支流が形成した大沖積平原（インド大平原）のほぼ中央部に位置するが、遺跡はその北縁部 (Lat. 27°31' N.; Long. 82°2' E.) に立地し、ネパール国境まで北へ約50km にすぎない。行政区画では、ゴンダ (Gonda) 県とバライチ (Bahraich) 県の境界線上にある。現在、遺跡はサヘート (Sahēth)、マヘート (Maheth) と呼称され、1863年のカニングム (A. Cunningham) を嚆矢とする発掘調査の成果により、前者が佛教聖典に頻出する「祇園精舎」(Jētavana vihāra)、後者が「舎衛城」(Śrāvastī City) と比定されるに至っている。

サハート地区の既往の調査では、寺院・僧院・ストゥーパ・井戸など数多くの遺構が検出・復元され、史跡公園として維持・管理されている。日・印共同学術調査団による発掘調査もこのサハート地区内の未調査部分を対象に実施され、1987年1～3月にかけての第1次調査では数々の興味深い調査所見が得られたが、それらは1987年10月より予定している第2次調査の成果を加え、報告書で

多角・総合的に検討・分析されるであろう。

一方、含衛城に比定されるマヘート地区は総延長5.26kmにおよぶ城壁（土塁）で囲繞された約1.65km²の広大な遺跡範囲が推定されているが、現状はほぼ城内全域を覆い尽す喬木・灌木の梢を渡る寂寥なる風音に、昔日の喧噪が思い巡らされるだけである。

このマヘート地区に対する発掘調査は、ホーエイ (W. Hoey)、ホーゲル (J. Ph. Vogel)、シンハ (K. K. Sinha) らを中心として、ソブナート (Sobhnāth) 寺院、パキイー・クティ (Pakkī kuṭī)、カッチイー・クティ (Kachchī kuṭī) などの主要建物跡や城門・城壁の調査が実施されているものの、遺跡全体からみると既調査面積は僅かであり、全貌把握には程遠い状態にある。

以上の状況を鑑み、小稿では、舍衛城に比定されるマヘート地区について、先学の調査成果を中心に、順次考古学視点から概述したい。

なお、1986年度から、インド考古調査局（Archaeological Survey of India=A.S.I.）による遺跡全体を対象とした継続的な発掘調査が計画・実施されており、舍衛城を考究する上で、新たな展開が期待されよう。

(2)

周知のように、佛典およびジャйна教聖典によると、紀元前六世紀頃いわゆる十六王国が成立していたが、マガダ(Magadha)国と並んで最も有力であったコーサラ(Kosala)国の首都がシュラヴァスティーである。釈尊在世当時の国王はパ

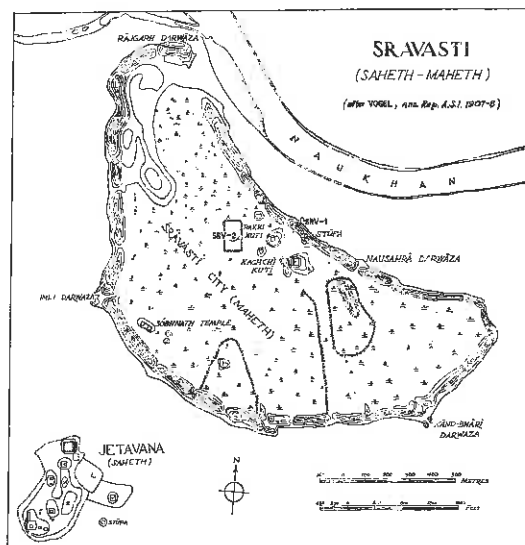


Fig. 2 イムリー門稜堡より南方サヘート地区を望む

Fig. 1 シュラーヴァステイー遺跡平面図 (Excavation
At Sravasti-1959 より)



Fig. 3 城壁上より北方を望む

セーナディで、王子ジェータ、ガハパティのスタダによる祇園精舎建立は諸種の佛伝に詳しい。

舎衛城の平面形は東南方向に流下したアチラーヴァティー (Achirāvati=Rapti) 河旧河道に沿って、東北方向に弦部を向けた三日月形を呈している。前述のように、周囲は総延長5.26km、比高差10m前後にもおよぶ高い城壁で囲繞され、城外と明確に区画されているが、これは玄奘が『大唐西域記』に室羅伐悉底国の宮城の周囲20余里とした記載とも大きく無盾しない。

今、城壁上に立つと、城外には肥沃な耕地が地平線まで続いているが、古代には一面の森林の中に耕地が点在する景観であったと推定される。また、東北から南側にかけての城壁は7.5m～9m前後を測り、北から西側のそれが10.5～12mを測るのと比較して全体的に低い、これはアチラーヴァティー河の存在がその高さを補っていたのであろう。

城壁の頂部には大型方形埴状のレンガ(約30cm四方、厚さ約9cm)や通常のレンガ(縦約14cm、横約28cm、厚さ約7.5cm)が部分的に積み重ねられた状況で遺存し、周辺には破片が散乱しているが、これは幅3.9～5.2mを測る胸墻遺構である。

また、城壁には数多くの開口部があるが、イムリー (Imli) 門、ラージガル (Rājgarh) 門、ナウシャラー (Nausahrā) 門、カンダ・バリ (Kānd

Bhārī) 門は、名称は別として、当時の西南、西北、東北、東南部に設置された城門を示していると推定される。すなわち、側面を防禦する稜堡の存在によって、イスラーム侵入以降の村名・人名や植物名などが付与された単なる城壁の切れ目や窪みと区別できる。

城門は共通した平面配置が採用され、その規模はイムリー門の場合、幅約7.8mの通路を挟んで南北に各々高さ約12.6m、14.4mを測る稜堡がある。南側稜堡の頂上には大型長方形レンガ(縦約30cm、横約42.5cm、厚さ約7.5cm)による不整形な基壇が遺存しているが、ホーエイはこれを望楼の基壇と推測した。また、北側の稜堡で使用されるレンガは、反対側に位置するナウシャラー門の稜堡に使用されたレンガと同規格であり、ホーゲルはこれをもって両門が同時期の構築になる根拠とした。稜堡の高さは、最もよく遺存するラージガル門の場合、約18.9mに達する。

また、イムリー門の正面には約75×90mの範囲に遺構群があり、発掘調査を実施したホーエイは主に衛兵詰所としての機能を推定した。同時に500枚余の未焼成の粘土製刻文封印を検出し、ラクノウ (Lucknow) 博物館へ移送したが、惜しむらくは所在不明になったらしい。

(未完、引用・参照文献は巻末)

広東商人麥燦宇と舟山・南海普陀山

松 浦 章

1. 緒 言

清代の展海令（康熙23、1684年）以降、中国大陸沿海地域の商人が海外に多数進出している。その中心であったのが福建・広東・浙江等省の沿海地域の商人であった。^①

福建や浙江の商人が海外進出した例は既に拙稿でも明らかにしたが、^②海外貿易に進出した広東商人については近年中国の研究者が南海方面について明らかにされているのみで、日本貿易についてはあまり知られていない。

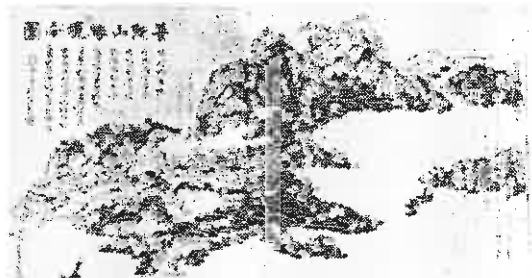
このため本稿では、康熙中期に浙江沿海の舟山列島中にある普陀山へ漂着した広東商人の長崎貿易における事蹟を通して、清代前期における広東商人の日本貿易についての一考察を試みたい。

2. 広東洋商の舟山・普陀山漂着

雍正13年（1735）序刊の『南海普陀山志』巻十、事略に、広東洋商の麥燦宇が普陀山へ漂着したことに関し以下のように記している。

広東洋商麥燦宇、自東洋回、忽夢巨人索其舟、載一大骨、商怖而醒、時值夜半、黒風大起、舟欲沈、衆呼號不止、忽轉風、舟行如駛、黎明達岸、至普陀矣。大喜、入寺禮大士、見一天王足墜像前、與夢無異、瞻拜驚歎、遂施金新像焉。

とあるように、広東洋商の麥燦宇が東洋即ち日本からの帰帆中に、普陀山に漂着した。彼は日本からの帰途、船中で夢を見た。それは巨人が彼の船を引き、同船に大きな骨を載せようとする夢であった。彼がその夢から醒めたところ夜半であっ



『普陀洛迦新志』による

た。大風が起り、船が難破する寸前で、乗船者が呼号したものの風は止まなかった。しかし、風が転じて、船が海上駛走し、明け方に、ある岸に着いたのである。そこが舟山の普陀山であった。乗船者が大いに喜び寺に詣でたところ、天王像の足が像の前に墜ちていたのである。この光景は麥燦宇が船中で見た夢の情景と異なることが無かった。このため麥燦宇は神の加護を悟り、後に金の新像を奉納したとある。

この記事は、舟山、普陀山の海神信仰^③の一例として記されたのであるが、事実であるか否かについて究明されていない。民国20年（1931）排印の『普陀洛迦新志』巻3、靈異には康熙29年（1690）の条に記されている。

そこで、広東洋商麥燦宇が、この頃日本貿易を行っていたかを次節で述べてみたい。

3. 麥燦宇の日本・長崎貿易

長崎貿易の資料に麥燦宇の名が見えるのは、元禄3年（康熙29、1690）の22番南京船の船主としてである。同船は2月18日に上海を出帆し、同22日に長崎に入港した。同船の「申口」に拠ると、

船頭麥燦宇儀、去年は拾九番船に客仕罷渡り^④

申候、乗り渡り之船は、今度初而渡海仕候。

とあり、麥燦宇は元禄2年（康熙28、1689）に19番船の船客として、既に長崎へ来航していたのである。

元禄2年の19番船は船主が陽自遠で、上海より長崎に来航し、「唐人数八拾人乗組」^⑤とある大型船であった。麥燦宇はこの乗船者の一船客であった。

元禄2年は、清朝が展海令を頒行した康熙23年（貞享元、1684）からまもない頃で、長崎貿易において最多の来航中国船数を見た元禄元年（貞享5、康熙27、1688）の翌年である。^⑥

海禁の撤廃により、日本貿易に多大の利益を見出した中国商人が多数長崎に来航した頃で、麥燦宇もその内の一人であった。

彼は元禄4年（康熙30、1691）の41番南京船船主として長崎に来航している。同船は4月15日に上海を出帆し、同月28日に長崎に入港し、同船の

「申口」に拠ると、「本船頭麥燦宇義、去年は貳拾貳番船に船頭仕参申候」^⑨とあるように、元禄3年にも来航していた。

その後、麥燦宇の長崎来航は元禄8年(康熙34、1695)の36番広東船船主として知られる。同船の「申口」に、

私共船之儀は、広東之城下に而仕出し、唐人数四拾貳人乗組候、(中略)右之日限(五月廿五日)に広東出船仕、六月廿日に、普陀山迄乗参候而、数日逗留仕、糸端物之荷物を招乗せ、當月(七月)十五日に乗り出し申候。^⑩

とあるように、上述の2度の船主の場合とは異なり、「広東之城下」とあることから広州を出帆したものと考えられ、普陀山に寄港し積荷を整え長崎に来航した。さらに同船の「申口」には、

船頭麥燦宇儀は、去々年四拾四番船より客仕罷渡り申候。^⑪

とあるように、麥燦宇は元禄6年(康熙32、1693)の44番船の船客として長崎に来航している。元禄6年の44番船は船主張五官で、その出帆地について、

広東之内潮州に而仕出し、則彼地において、唐人数四拾八人乗り組候。^⑫

とあるように、広東省の潮州から出帆した船で、麥燦宇は同船の船客として長崎に来航したのである。

4. 小 結

上述のように、広東商人麥燦宇は元禄2・3・4・6・8年(康熙28、29、30、32、34)と7年間に5度長崎に来航の知られる商人であり、この内、元禄3・4・8年は船主であり、同2・6年は船客であった。

『普陀洛迦新志』巻3に、麥燦宇の普陀山漂着を康熙29年(元禄3、1690)条に記しているが、日本側資料により、彼の長崎貿易に従事していた時期とも一致する。このことから、『南海普陀山志』等に見える日本貿易の帰途、普陀山に漂着した麥燦宇の話は事実であったと言える。

麥燦宇が長崎来航船の船主として3度来航しているが、その内2度は上海からであり、1度は広



甬江河口より見た舟山列島
(1981年4月撮影)

東からである。

長崎貿易において、上海は地理的にも、航海上の有利さから見ても広東より勝っている。それをあえて広東から長崎に来航したことは麥燦宇が広東省に本籍を有する商人であったことを傍証するものである。

以上のように、麥燦宇は展海令頒布もない時期に広東から上海に進出し、日本貿易を志した広東商人であったと言える。

〔註〕

- ① 松浦章「清代福建的海外貿易」(『中国社会経済史研究』(中国・厦門)1986年第1期、103頁。
- ② 同論文、松浦「寧波商人姚鵬飛と長崎貿易」(『史泉』58号、1983年11月)。
- ③ 余思偉氏「清代前期広州与東南亜的貿易關係」(『中山大学学報』(中国・広州)1983年第2期)。
- ④ 佐伯富氏「近世中国における観音信仰」(『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』1961年12月、同氏『中国史研究』第2、1971年10月)において麥燦宇の記事について触れられている。
- ⑤ 『華夷変態』中冊(東洋庫刊、1958年3月)、1,193~1,195頁。
- ⑥ 同書、1,088頁。
- ⑦ 192隻が貿易許可された(同書、中冊、1,059頁)。
- ⑧ 同書、1,343頁。
- ⑨ 同書、1,743頁。
- ⑩ 同書、1,744頁。
- ⑪ 同書、1,549頁。

資料室蔵・絵馬資料について

角 田 芳 昭

本学資料室に所蔵している「絵馬」を今回展示したのでここに紹介してみたい。

絵馬とは神佛等へ祈願や報謝のしるしとして奉納された板・銅板などに描かれた絵のことである。この絵馬は大きく分けて二つの形式があり、一つは神社の絵馬堂とか寺院の舞台などに奉掛されている大形で扁額式のものを大絵馬と呼び、他の一つは現世利益的な民間信仰をともしなう社寺や小祠、小堂の格子などにかけられている小形で吊懸式のものを小絵馬と呼んでいる。大絵馬は祈願、報謝の内容を大衆に公然と知らしめ、公開的な性格が強く感じられる。反面小絵馬は心に秘めた悩みごとをひそかに神佛に願って少しでも解決してもらうのが本意であり匿名性をもっている。そして現代においてもこの小絵馬は現世利益的な民間信仰の流れとともにその命脈を保ち続けている。大絵馬は明治中期以降衰退の途をたどり、現代ではほとんど奉納されていないのが現状である。

本学に所蔵する絵馬は「雨乞絵馬」(写真①)と「雨乞成就絵馬」(写真③)であり大絵馬と小絵馬との中間のものである。雨乞絵馬は上下51cm、左右70cmのもので、図柄は緑地の上に飾り黒馬を描いており、画面向って右に延享三丙寅年(1746)秋九月吉辰と年号を記し、左側に願主遠藤氏光悦とある。江戸時代中期の作品である。前脚をあげた力強い構図で緑松を配しており、朱の鞍をつけたもので、当時の職業画家の手になったものであろう。

絵馬はその言葉、文字より馬とのかかわりより



写真① 雨乞絵馬〔延享三年(1746)銘〕

出発しており、古くから神霊は乗馬姿で人界に降臨するものとの考えがあった。馬が乗りものとして欠かすことのできぬものならば、神に祈願したり祭をするときに、神霊を迎えるため馬をさしむけなければならず、ここに生馬献上の風習が生まれ『続日本紀』をはじめ古文獻には神に馬を献上したことが多数記されている。実際に献じられたことを裏付ける資料として京都の大藪遺跡の奈良時代の地層より祭祀用具とともに馬の下顎や大腿骨などが出土している。そして雨乞いには黒色の馬、日乞いには白毛の馬を神に献上した。黒色は黒雲たなびく雨を連想し、白色はその反対呪法と考えられ白日すなわち太陽を意味するものであったと考えられている。

これらの馬を描くことが困難になったことと、経済的負担などが重なり、板立馬という木製馬形を献上したり、あるいは土をもって馬形をつくり献上し無事を祈った。板立馬がいつそう簡略化されて絵馬となってきた。同時に生馬の献上も馬形を造り得ないものは馬の絵を献上したものと考えられる。浜松市の伊場遺跡の奈良時代地層から縦7.3cm、横9cmの小形絵馬が発見されており、上部中央に紐穴が見られる。同遺跡より平安時代地層からも絵馬が出土している。この頃神佛習合思想が普及し従来神社へ奉納されていた絵馬が寺院へも奉納されるようになった。

室町時代中期になると画題も馬以外のものが多く描かれたし、形状、仕様も多種多様になる。そして大形の絵馬も描かれたし、専門画家や著名絵師も筆を揮っている。狩野派、土佐派等の著名画家の銘入りの絵画も多く献上され今の世に残っている。この頃より著名社寺への大絵馬の奉納が盛んとなってくる。桃山時代に続き江戸時代になるとさらに盛んとなり、図柄も多種多様となってくる。馬図、神佛図、祭礼図、参詣図、境内図など神佛に関係あるもの、武者絵、歌仙絵、船図、芸能図、物語絵、武道図、生業図、算額、動物図、風景図、風俗図などの多種類があり、小絵馬に比べその範囲が広い。

この絵馬の奉納が流行し、大形化してくると拝殿やお堂には収まらなくなり、絵馬をかける特別の建物が建てられることになる。即ち「絵馬

堂」が成立する。絵馬堂が最初に建立されたのは定かでないが、造営年代のわかっている最も古い建物は豊臣秀頼が慶長13年（1608）に造営した京都市北野天満宮の絵馬堂である（写真②）。この頃より各地の大社寺の絵馬堂も次々と建立されていったものと考えられ、その遺風をいたるところで今日見ることができる。

本学所蔵の他の1点は「雨願成就」（写真③）絵馬で上部に奉獻、向って右側下部に雨願成就氏子中とある（上下65cm、左右95.5cm）。雨乞神事を行ない無事降雨となったので、そのお礼として成就祈願絵馬を奉納するところである。神主、巫女、^{雨乞}村長が描かれ、喜びが身体中にあふれている表情が良く描かれている。彩色されており当時の職業画家の筆になったものであろう。この雨乞、日乞祈願は天平宝字7年（763）を最初として文献に多く出てくる。大和の丹生川上社と京都の貴布祢社は水を司る神として深く信仰されていたため、「雨乞い」すなわち降雨祈願に黒毛の馬、「日乞い」止雨祈願には白毛の馬をこの二社に献上している。現在では大絵馬の奉納はほとんどなく、小絵馬が信仰の対象として社寺へ奉納されている。お正月に参詣した人々による祈願が最も多く、家内安全、良縁、健康、入学祈願などを絵馬に托し、幸運の



写真② 北野神社絵馬堂

紹介を願っている。この絵馬を蒐集し一般公開としているのが京都市東山区の安井金比羅宮内にある「金比羅絵馬館」であり博物館施設に類するものとして全国唯一のものであろう。ともあれ、絵馬はその時代、時代の社会風俗の一端をよく表現しており、社会風習、民間信仰などを知る上で貴重であり、また大絵馬は美術的価値の高いものも沢山あり貴重な文化遺産として保護していかなくてはならない。

参考文献

『絵馬』 岩井宏実著・1984年5月・法政大学出版局



写真③ 雨乞成就絵馬

昭和61年度調査報告「岐阜・愛知」地方の遺跡

昭和61年度資料室所蔵の資料に関する出土遺跡の調査を7月中旬「岐阜・愛知」地方を中心に踏査した。

『本山考古室要録』に三河国、尾張国、美濃国出土資料として縄文・弥生時代の土器、石器あるいは古墳時代の須恵器が収録されており、これらの資料について本山家よりの搬入の所在について確認をしたところ、所蔵されていたので、これらの資料の出土遺跡調査を行なうと同時に、地方博物館施設について見学研修を行なったので、ここに記しておきたい。参加者は文学部教授網干善教先生と途中より同行してくれた地元岐阜県出身の徳田誠志君(大学院生)、角田芳昭の3人である。

最初におとずれたのは「岐阜市歴史博物館」である。昭和60年11月開館という新しい博物館であり、玄関を入った吹きぬけの天井が素晴らしい。館長補佐杉山伸樹氏のご案内で館内を見学する。最新の技術と展示方法により資料が生き生きとしている。しかし一步展示をあやまると当時の生活より遊離した展示となる恐れもある。常設展に続いて企画展を見学する。「暮らしいまむかし」と題し、明治、大正、昭和時代の暮らしの中の諸道具、衣類、写真などが展示されており、郷土文化を知る上で非常に参考となるものである。今後の発展が楽しみな博物館である。

次に可児市を訪れ「可児郷土資料館」を見学する。本学資料の中に可児市土田遺跡出土と記録されている石錐・石鏃・須恵器等があり、現場へ向う途中立寄った。可児市は中部圏の中核からわずか30キロに位置し、早くから交通の要衝の地とし

て先進文化をとり入れており、遺跡、名所の多いところである。そのため社会教育の盛んなところで、資料館も充実したものが建てられている。可児郷土資料館は昭和48年8月開館され、郷土の歴史及び美濃古窯を中心に展示されている。附設されている久々利公民館を含め延面積1,544m²である。また江戸時代木造入母屋麦藁葺き民家を移築した「民俗資料館」には市内各地に伝えられてきた民俗資料約200点が展示されている。これらの資料を通して郷土の人々の過去の生活を見ることができるとともに郷土愛を目ざめることだろう。また社会教育委員会、郷土資料館が中心となり『可児市の文化財』という小冊子も六号まで発行されており、文化財の知識の啓発と郷土意識の向上に寄与している。社会教育課長奥村千郎氏および大澤男雄氏、郷土資料館川合俊氏のご案内にて説明を受け諸々ご参考と助言をいただいた。

次に郷土資料館より南東に位置する大萱古窯跡群にある豊蔵資料館を見学した。この施設は陶芸家荒川豊蔵氏の蒐集された古志野の陶片及び氏の作品など約230点を展示されている。

この地は荒川豊蔵氏が昭和5年久々利大萱で古志野の陶片を発見し、その復元に成功されたところで、これを記念し建設された。またこのあたりは黄瀬戸、瀬戸黒、織部が盛んに焼かれたところで、当時の窯残がいくつか残されています。齋藤基生学芸員のご説明を受けた。

次に本学所蔵資料「須恵器」(本山考古室要録番号227)に美濃国可児郡土田村今渡古墳出土とあるので調査に訪れる。土田地区には著名な土田北割田3号墳をはじめ、土田渡地区にもあり、八幡神社周辺に分布する古墳である。本学蔵にこの渡地区で焼かれたと考えられる資料の須恵器があり、現在9基の古墳が確認されている。副葬されていた須恵器類から7世紀に位置するといわれる。本学資料を研究する上において多いに参考となった。その他長塚古墳を見学する。

夕刻下呂町へ着く。温泉につかると一日のつかれも癒える。当日の調査見学の話をもとめる。

翌日は早朝より下呂町にある著名な「峰一合遺跡」及び考古館を見学する。この遺跡は昭和41年



下呂町峰一合遺跡考古館(岐阜県益田郡下呂町森峰)



土田渡古墳群出土須恵器
(岐阜県可見市土田渡地区)

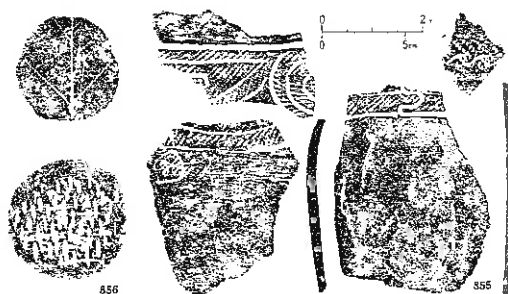
度より逐年6次にわたり発掘調査が行なわれ、縄文時代住居址および弥生時代の住居址遺物が発見された。特にクルミの炭化物とともにパン状炭化物が珍しい。また石器類も多数出土し、これらは考古館へ陳列されている。また復元住居5戸がある。この館の存在は当地方の文化の向上に非常に益している。下呂より名古屋へと南下する。

午後より名古屋市博物館を見学する。同館学芸員犬塚康博氏（本学校友）のご説明を受ける。名古屋市博物館は昭和52年、郷土を中心とする歴史博物館として開館され、尾張地方の歴史を物語る資料を原始から現代まで10のテーマに分け時代を追って展示している。実物資料、模型、ジオラマや映像などで立体感も出し、平易に解説され、理解しやすいようにしている。学芸員もそれぞれの専門分野をもち、展示解説はもちろん、調査研究、

紀要類等の発行にも活躍している。日本有数の充実した博物館である。図録、解説書、紀要類の寄贈を受け、また愛知県の遺跡のアドバイスをいただいた。テーマ展においては「愛知の新出土展Ⅱ」として開催されており本学調査遺跡等も含まれており非常に参考となった。

午後より「尾張国熱田貝塚」出土資料について調査を行なった。この遺跡は現在高蔵遺跡といわれており、熱田台地の東端に位置し、弥生時代を中心とする大遺跡であるが、現在はほとんど消滅しており公園となり高蔵貝塚の標識が建っているのみである。昭和60年調査された資料が名古屋市博物館で展示されており、その資料と本学所蔵資料とを対比させ同様の文様等が確認された。

最後に西尾市上町八王寺にある「八王子貝塚」を調査及び見学した。この遺跡は矢作川左岸の台地端に立地する縄文時代後期の大貝塚であり、古くから「西尾の貝塚」「西の町貝塚」などとよばれ数回の発掘が行なわれた。最近では昭和56年夏、道路建設のため、西尾市教育委員会による発掘調査が行なわれ、土器、石斧、石鏃、骨角器、土偶など豊富な遺物が出土した。この資料も名古屋市博物館のテーマ展に展示されており、縄文土器の文様等にもその類似性が認められた。限られた日数ではあったが実り多い調査であった。最後に愛知県在住の松廣寿衛氏（本学校友）より寄贈していただいた縄文土器、青磁、古染付茶碗等30数点を名古屋市中区古美術店「竹泉」で引渡しを受け、資料室へ持ち帰った。〔角田芳昭〕



八王寺貝塚出土縄文土器（愛知県西尾市上町八王寺）
(本山考古室要録より)



八王寺貝塚遺跡及び標識（愛知県西尾市上町八王寺）

●『関西大学考古学等資料室紀要』(昭和61年3月)第3号 目 次

関西大学蔵銀象嵌把頭について一亀甲繫文の類例と考察	網 干 善 教
東京学士会院会員神田孝平	角 田 芳 昭
資料紹介「金石文拓本資料」	考古学等資料室
昭和60年度博物館実習総括	博物館学課程
中国・長江流域の遺跡と博物館	泉 森 皎
馬野繁蔵氏寄贈「瓜破遺跡採集資料調査報告〔II〕」	考古学研究室

●『関西大学考古学等資料室紀要』(昭和62年3月)第4号 目 次

舍衛城と祇園精舎(覚書一)	網 干 善 教
神田孝平の翻訳文献について	角 田 芳 昭
資料研究多胡碑の「太政官」	山 下 慎 吾
資料研究「金井沢碑(高田里結知識碑)」	文 珠 正 子
資料研究「キリシタン墓碑について」	水 野 みゆき
都江堰考一戦国時代四川の水利システム技術の調査考察	下 間 頼 一
馬野繁蔵氏寄贈「瓜破遺跡出土採集資料調査報告〔III〕」	考古学研究室
昭和61年度博物館実習総括	博物館学課程

●昭和61年度購入資料

明器「竈」中国漢代

明器「埴山陶鼎」中国漢代



漢代名器「竈」



漢代明器「埴山陶鼎」

編集後記

考古学等資料室の管理運営委員長として長らくご指導をいただいた横田健一教授がこの3月で定年となりご退職された。かわって副委員長の網干善教教授が委員長に、副委員長には上井久義教授が就任されました。横田教授は『阡陵』(昭和55年5月創刊)の名付け親であり、第1号より毎回巻頭を飾っていたが、考古、民俗、歴史等の論考を通じてその博識を披露下さいました。今後のご活躍を祈念いたします。

今回は関西大学創立100周年記念事業の一環として行なわれているインド国との「日印共同学術調査」に参加された先生方に調査の内容について寄稿をいただきました。

昭和60年移転以来整備しておりました展示室がこのたび一応の完成を見たので、去る5月16日から学内公開を始めました。以降毎月第3土曜日12時より16時まで学内公開を行う予定です(但し8月・9月・1月・2月は中止)。多いに見聞を広めていただきたいと思います。

表紙の写真は「蔵骨器」であり、新羅統一時代(8世紀)の資料です。火葬の後被葬者の骨を納めたもので、器面は花卉文・雲形文・鳥獣文・菱文・長三角状文などでかざられています。総高38.8cm(第二展示室第8ケース展示資料)

〔角田芳昭〕